

易問答

福岡縣師範學校

圖書部

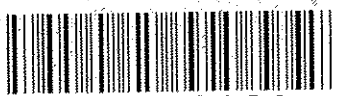
部

番 3-BZ

號 2

冊ノ内

圖書 和圖書 遊



a 1 3 8 0 3 2 7 3 7 6 a

福岡教育大学蔵書

T 1A1

67

Ka 86

先試まづ小乘しょうじょうれ説法せっぽうありきなり。一ひと輪りん
聞縁もん縁覺かくを切きりて。受う口くちう同どう善ぜんは
終しゆう。隨ずい義ぎ涉せつしむしは。それより
漸ぜんく中乘ちゆうじょうに移うつり。末まつ後ごふいしてりて
佛ぶつ法の極ごく意い大乘だいじょうの真ま面目めんめくを

説法せっぽうありしなり。やうの座ざを觀かんて法ぽう
を説とくといふは。讀よみむし時ときより始はじまるなり
うゝもふ。唯ただ時とき才さい助すけれ才さい能よく讀よみ
寫しやく額がく六りく此こ情じやうを穿くち一ひと言ごんは下げり
肺はい肝かんを穿くし。終しゆうにそれをは服ふくせし

此。實多座を觀る法を説くは
巨擘といふべし。

松園仙史喜之彦

交易問答卷之下

加藤弘藏著

才助

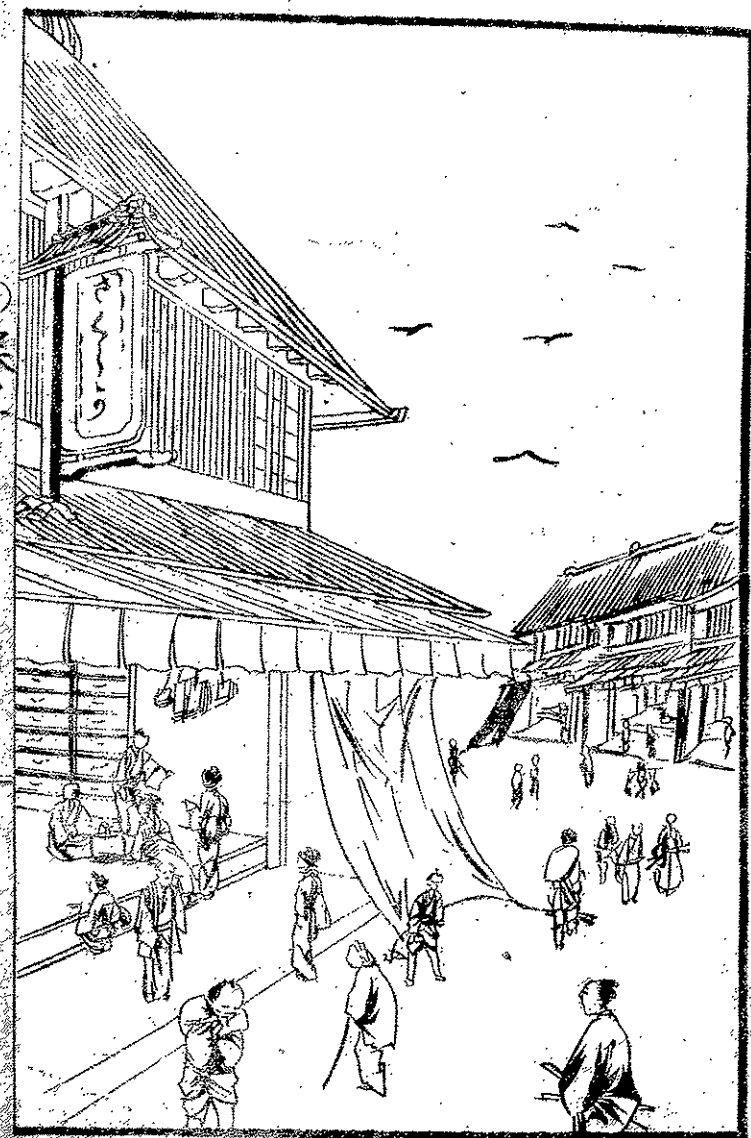
此書版中より一巻一巻と出づ。是より
又下巻の長談義と始めませしが。そ
こでこの函箱でハ。日本ハ日本國內
の徳色で。十多又著せる國でありらる。そ
伊も西洋人と交易とせらるよハ。及む

まいたとさといひるさるけれど。失禮
ふりう。それが第一の公地。遺といふも
のでござる。何れといふは先刻も話
し申さ通り。世が開始して。ぶんく
賣買の道を開けし時。台は僅々村
々。内身で賣買とす。このれど
が。それうらぶんくと開けるは後
拾里も二拾里も隔つ。國は往

より来たりして賣買とさる根り
あり。それうら又関東より上方の方
は往より上方より関東より来たり扱
して。賣買とさる根より。このでさ
るが。けねは往來して賣買とさる根
より。つと。いふも。あながち其土地
土地で。物より不足より。そのり
つと。いふので。いごさ。らん。随分其

去北くと問は合れた。それでもま
まふいふは受けれども。そこが人
といふ者へ會歎林と遠て。知恵の
は従て。あ事あひくと十分は金
まも松よ志といふ天性があつて。
又其志といふふが働次第で出来
る松は神様が生付て置いて下され
りらの事でごさる。そこでよく考

見るといふ。以前西公儀で。交易を盛
志中りといふつこのも。と度
天子様の交易と盛よあそをさうと
思召すのも。即け道理で。何も日
国内の諸色で。あふが是りといふ
とよふ目付でいふ。是下のりひる
通と並交易といふいで。海で来と日
本國のよと。それでも海とい



道程はるけれど。そこが即人百圓有
 の天性で。あひくあるが全使さるのと
 好むのぶら。油とりふあが入用よ
 るらて。それで髪かみの潤澤うるせきの如ごとか。松まつ
 りろくろくと用ひて。どんくどんく巧たくみ熟じやくよな
 り。とでハヤれはやれ揚あがり香かぶの。松まつ金かね香かぶぶな
 きぶつこのころんぶの。あひくよせ
 しくよらて来きるとりふのハ是下こ探たん

のふまゝといふでもよい。奢侈の沙汰さ
と思ひるさうだが。決してさうでもない
らん。即世が開て来れば。斯るものも
の及程でござる。西洋國の物が皆益
よまるといふものも。是と同じふで。
ハ不用だとおもふあても。これらと
どんと世の中が開ると後で。皆入用
ふあまるといふのでござる。それらとあ

の入用不用といふのは。大抵ハ世の開
け次第の事で。唯しる暮してさ
来ればよいといふを。昔も今も食物ハ
腹が満さるを。衣服ハ寒くさ
つなればよい。住居ハ露さる。凌け
ばよいといふ程を。何れも遠方の
あと求るよも及ばぬ。それらを。村
々々の内で。何も角も。るが。千分よ。是

さよ相遠ハあけれども。人間といふ者ハ
決してさうリハあらん者なくござる。それど
うら西洋人との交易ハ其用ありけりて
決してせむともよいといくバ。夫張日本
國內同士の賣買も決してせむとも
よし。又日本必内同士の賣買が志あ
ければさうん事あり。夫張西洋人との
交易も志なければあらんていざらん

か。それよまじむき道販交易のさうけ
で。眼前世の中の大難儀かゝるさう
さうかあるていざらん。それハ何ぞ
といふは例の外國米の一件でござる。若
し日本外國米がといらるらるらるの
さう。それこそ天保七年の飢饉さも
まして。世れ中の難儀といふやれを
どんるであつたらふら。今く外國米

の米

のむりつと申ぐ。僕等の知る者ども。
けり。昔もをどりうぐうぐと張三度此
飯とくぶて居られるのでござる。それ
ぶくらに世にさし日本よどんる飢
饉があらふとも。世界中悉く飢饉
よるるといふも先づいふゆゑ。
そんな時分は伊妻りり来と
持くくると相遠るいふも。

ても天保七年の招る筈候は百く案
あつたてはござらん。ナント頑六さん
等ハ決して西洋人のあつてといふで
いふいふ。今や交易のあつてはござる
ん。

頑六

成程是頃の由理解ハ。由を極でこ
ざる。實よりいふと。通日本國內同士

の賣買も西洋人と此賣買も畢竟ハ
同ト存程ぶくら。世が開るゝ後ハ
交易も矢張志あけれハるらんはお
遠ぶざもさふし。又外國米の一件扱
も突よりひるさる道。今く交易のあり
けは相遠ぶざらん。倭或米屋の内話
は凡を世の中よ。まき最大切なるの八百
姓でござつて。る姓といふ者ハ異さ

さのりといふく。米百米中泥もこれ
よろつて米業よ骨と折り。稲麦我
まどぬ。すべて法色と作り切てく
れるりのさうら。けりお玉中
天子様と始として。僕輩の松子箆い
者よ至る造身多相意よとらとあふ
よ著して居られる。それぶくら木よ偷
てりて見れば。る姓ハおぢ。は武家方

ともども職人や商人ハ枝葉の枯る
者ぞそりてござる。譬ハ松や杉と植る
とも。先ツ身一又根の枯れぬ根よ。始
終と氣と附て種々水と中る根よまじ
が。身一肝心なるので根さへ枯るけれ。枝
葉ハ列よ身を附ずとも。自然と生立
りけでござる。假令りくら必を用て枝
葉と世話しければこそ。根と未葉て益

ふ日よハ枝葉ハ自然と枯るよまじ
ふりのでござる。人間は上も其通で。
市上で身一招の百姓と夫切りて。農業
の盛よるる根よまじるよければ。枝葉乃
市武家方や町人よハ列よ市世話がら
とも。自然と其お業が安樂よ出来る
りのぞそりてござる。それぞり聖人
と中らの教よハる姓と身一又夫切り

て世話としく中り。又商人杯といふ者ハ
怒心の深い者で。濡手で粟と糶む振る
儲として。せいしく又善すりのぶの。高
人が澤山よるつて。高賣の益が盛り
あると。甚毒の中の風俗が日々くまなり。
其上は大切る百姓が自然と氣が衰
つて。あひくと田舎を逐出て商人よるる
振る事よるつて。おのづと田地が荒る

振る事が出来るなり。何でも商人も
成丈取押して盛よるなり。い振よるなり
のが。市上の市政道の中一ごとくいふまで
ひびく。日本國內の事でもさへ商人の盛
よるるのハ。簡樸よりいりのごのよ。ま
けよ。西洋人との交易までも遠く盛
よあそをさしつら。以上毒の中の風俗
かどんる事よるつて。誠はけん

のんる語でいざざらんり。

才助

頑六君矢禮うまう是下の程密ハ一向ヨラ
らんむも偏屋る先生いらくそんるるをりふ
りのぶぶそれハその先生が僕土の太吉のゆ
ハ何でも前でもよいの身で後世のよハま
でもよいのハるいと思込で居るりのぶら
らそんるるあうくさい事とらふのぶら

そんる説ハ今く世の開けるい時分を
るけれハ通らるい事とそらうでござる。
むる姓といふ者ハ名業とするりのぶら
ら。國の根の根る者も貴い者まお遠
るいざそれバとて唯百姓才あつて世の
中の治るりのでもござりまい。職人や商
人といふ者かあつて居る姓の作り出し
あうらうくくのおと製ハとら。又其お

と憂さなむいふりするら。畢竟百姓の
農業も益よくテの互理でござる。それど
りらすべて農工商といふ者ハ三島の括
まりので相互に助け合てとある者でま
ッでもるくつてまむといふ者ハとざらん
儀商人といふ者ハ怒みの深い者で。濡
手で業を括む括る儲として。世い
くく又蓄するのぶら。商人が多く

るつて商賣の道が盛よると。世の
中の風俗がさるくさるといひるさるけ
れどそれハとんでもない事達つて。理窟
でござるむ商人といふ者ハ百姓よ比て
見れむ。暑さ寒さの秘伝もすくなく。随
か人のころい者で。利を儲る事も大き
いけれど伊もぬで濡手で業を括む
括る儲も出来る者でもらう。又人の

つらいつらいつらのハ。高人ハ百姓と遠く。
市中ハ任て身体ハ束どぐ。ゆで骨と
折らるるければ。あつらんお業ぶくら。自
然と知恵が開るりので。それなどふ
も徳實る風が薄くるるりのでとさる。
係是ハ人々神様く戴い國有の
知恵と磨さ出すので。自然とさつ
るりのさくら。あるがら。さつるいと

ハレよせん。是とつらいつらいつらのハ。人々の成丈
る鹿よ育て。固有の知恵と出せせる
いねよするが。いといふゆよるる。様を
てハ神様の庄趣意よ背くで。こさる。美
ごりも人々の知恵が開て来れ。自然
と徳實る風の薄くるるりのハ。仕方が
るい。が。されを。と。高賣する。盛る。れ
バ人々。さつる。さつて。毒の中。の。風。係。が。



罷れてもよいといふ道理ハ決してよい。
才一風俗ハ正くるべし。あつて
こもつらうら。そこで 村上で成文學問の
用る格は世話があるて。飯合を活計
と違れて學問とする事が出来る。若
ども自然と學問とする者を羨む。
中少は世話をとるものでござる。尤も
學問と志すれをとりて。悪人がたつて

いふ譯でいふけれども。惣体字問と
いふ所の人の風俗をよくするのみ。
第一肝心な事はお遠ざけらん。さうり
いふ言はけごうら。是下ハ商人を冠飾の根
まひひるさるけれど。それハ決してさうり
いふ者でいふざらん。又商人が盛よるれ
バ大切なる姓が自然と氣が衰つ
ておひくと田舎と趣出でて。商人や

職人杯よるうら。田舎がおひくと荒
るといひるさるけれど。是も甚る差
ゝ程差でいふ。是もいひるさる通。
百姓といふ者ハ。甚貴の折る者ハ
相遠まいり。随分田舎と趣て商人
や職人よるる者か。いでもまいが。係
それ斗で田舎のあれる程よるる
者でいふざらん。尤西洋國でハ昔

百姓の親貢が重すぎて。田地持の
自分の倣つゝ稲麦の半分も親
貢は取れ。其上は伊ぶの角ぶのと各
と併て。金と取れ。より人紙よりこれ
よりするものより。自分も百姓
でハ活計が支るまい。授るより
と田舎と逐出て。商人よりる者もあ
れ。小職人よりる者もあり。中では

極貧乏の奴ぶの懶惰者ぶのハを
食よりるでる。松る事がある。その
でござる。志より。そのより。不祥であひくと。
る姓が減て。田地が荒てくる。その
うら。農業ハ自然と衰て。元の仕
があひくと。走く。そのより。来て。矢張高
賣も盛よりる。どころの話をハる。
交つて。ふんく。さびれて。き。小職人

や商人が多くなりつること。何の滋
も無く。も無く其國が衰微し
去りつること。是ハ余りる姓の
親貴が重すこと。どふしてもる姓
として居てハ。活計がつかさどく
の事。何も唯百姓の家の業が商人
や商人より見ると余程貴があれ
るより上りつること。いふはけでハ

ござらん。それよりさびて来貴や
遂上の平場が多くと来りて。る姓の
貴斗が重きこと。いふはけより
れハ。妻より姓が減て田地が荒るとい
ふ事。もろく。婚姻農工商が。三ツ共都合
よく参るりのこと。いふはけ。伊
といふは。譬へば。る姓計が多くて商人
や商人がすくむければ。る姓の

うらぶんぐと職人や商人よりなりて
と金と儲るいかり工いかり夫とよめる奴おが出来て。支
りりあひぐと忠工商の三ツが割合
よりなり。又職人や商人が多くて
る姓がすくなくはなす。又職人や商人
の中りりも百姓よりなりて金儲と
あやうといふ者あやうがいくらも出来
りり。別べつ候ごう彼かれ是こゝと 所ところ上うへでで出い来きす

かろくとも自みづか然ぜんと割合より参る
又相違あひだぶらん。それより農工
商とあひだ者ハ三鼎さんていで。三ツ共同ト括よ
世話としてやハあれば。三ツが三ツ共
あひぐと盛さかよるなりて。そこを金の
身上かぶんぐよりなりり。のぶさう
でござる。それよの又偏へん屈くつる先登と
いふ者ハけ括る道理と知らるいで。

のが肝なる事ぶさうでござる。諸色
のたけりといふもよくあるれば。元の仕出が
ぶら〜と多くある道理ぶら〜。とこそ
る姓や職人の仕出が自分と多く
あるよお盡とせらん。と及東京や大
坂よ。交易場と出寄きよらうて。ます
ます。交易の盛よるる格よるらと
りふも。即高買の方よ。世話とま

つて日本國中の諸色のたけりといふ
くもさうといふ。ありがたい思召で
がる。保 所上の世話といふのも。唯高
人よ其邊と寄して出中りるさうななり
で。別よあれもこれりといふ^{をん}は世話
とあるものでござらん。西洋國でハ
昔王様^{おうさま}がら〜と穢細なる事ま〜
世話をやいさりのぶら〜が。それハ

りつてゆく事だ。彼は商賣の
害よりるものごとくでござるものゆ
りけぶら。昔時でハ先ツ才一は徳色
のまけりるがゆくる格よさる世話
があれバ。自然とる姓や蔵人の仕出
す法をが多くるりて。畢竟ハ日本
國の身上が。あひくゆくるこけで。
決して偏屈る先生のりかやうなま

鹿る程窓ハ取るよ是らるいゆでと
きつる。

頭六

是下の此論ハ実よ法を不極。徳春の
まし。僕もとととハをんる道理ハ
ら。唯偏屈る先生のりかやうな
と身思て居るが。今の此理解で始て
さるがやうなまし。僕もとととハをんる

の曾いねに伺うかがちる事ことがござる。き通きとおり
の程ほど密ひそでり。是こゝの程ほど解との通とおり。
交易こうぎといふものハ決きしてござる。いふでハ
る。實じつよまぐて多おほく。いふよまお違ちがハ
ござらんが。係き先さき判きも法ほ話わしく。通とおえ本ほん
英い吉き判はぶの。係き断たあぶのといふ。醜しう夷ぎ
が。日本にっぽんよ来きる目め的てきといふ。若わかく先さき交易こうぎ
と聞きて。いふと日本にっぽんよ入い。改か才さいよりハ

人と親おしく。なりて。日本にっぽん人と欺あして
あふと端き服ふくさせ。あはづと日本にっぽんの諸しよ
を。買かを。して。いふ。弱じやくらせ。遂ついにハ
日本にっぽんの國くに造つくも彼か奴やつら等らも。あよ志し中ちゆうり
といふ。器きい目め論ろん見みがあるといふ。いふ
と。先生せんせいが。いふ。法ほ話わを。さる。が。これハ
いふ。で。いふ。若わか醜しう夷ぎが。来き道どうよ。を。い
ふ。い。目め論ろん見みで。あふ。の。あふ。い。候こう

交易がいくら結構な事でもあつた。
そのころは又後々日米國通も彼奴等
があよまれぬ程なゆでハ。滅り船
よ色と毒と喰ふ程なゆでのハ。あつた
らん。それト才助さん。是下の海論を
とふでござらん。

才助

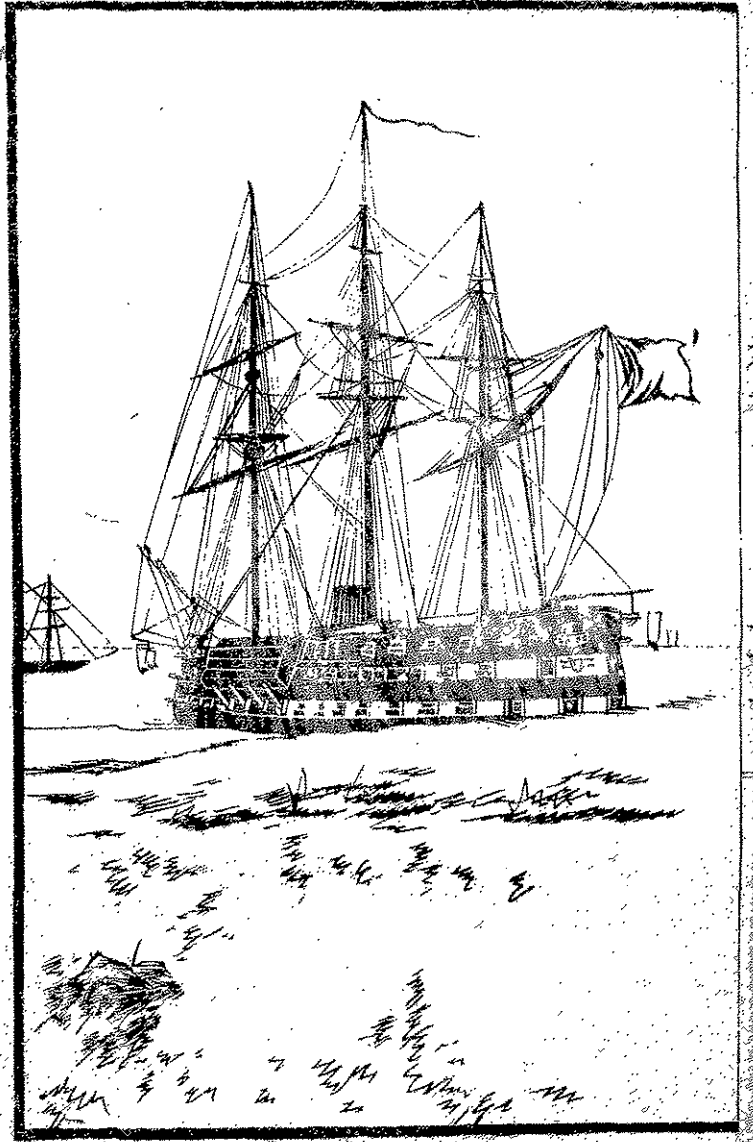
是下の海論も一應ハ此處でござらん。徳吉

太閤様時代より來る西洋人の元來日本
と奪ひとりふとりふ目論見があつた
來るよお遠ござらんか。けさ世の才
があひくと開けて。唯何の道程もな
人の國ととりふとりふふいできる世の
中で。彼令を國や武を國ハ。をんふんが
あつても。其外のふいで承知いすすの
でござらん。若うそりはいふの。人間

といふ者ハ。何時まで立てても怒心の纏る
りのでハござらんうら。との西洋人よも
そんな目論見が決してあるいともいも
れぬ。まゝ支那などではハりあくのるま
うら合戦の起つてもあれば随分
とすべしうらてハどんるる遠うら。伊
何時合戦と始まらぬでもいり
先西洋人よハ十分太い目論見がある

者と思て居るければあらんてござる。
倭僕等の考でハ倭令を西洋人よどん
る目論見があらんとも。矢張りあてハ
怖に膝を打て。交易をせよのが上列
でござる。伊左といふは。西洋人よ實
日本ととらふといふ念があれば。倭令
交易と断りなるとして。それを
念からせよりのでもござるまい。

かいがら
海岸に
おろす
大砲を
備へ
る
図



か。進む火繩銃や日本船で。今時の合戦
が出来たりりのでいごぶらん。そのれを
神國の名まを汚もねる事か出来
まいといひんません。そりりよきけごん
西洋人よそんる太い目論みかある
ららば。日本でハ猶怖は臆や。西洋人
よ負まい氣よるらて。どんとく。交易
とてごんく。盛よるは。此方ら